

能登半島地震によるシロエビとベニズワイガニへの影響

海洋資源課 研究員 三箇 真弘

1 背景・ねらい

2024年1月1日に発生した能登半島地震により富山県の水産業は多大な被害を受けた。2024年におけるシロエビ漁獲量は193トン（前年比35%、平年比37%）、ベニズワイガニ漁獲量は230トン（前年比80%、平年比54%）と、いずれも1985年以降で過去最少の漁獲量となった。水産研究所では能登半島地震によるシロエビとベニズワイガニへの影響を評価するための調査を実施したので、その結果を報告する。

2 成果の概要

シロエビについては、幼生の生息状況を把握するため、神通川河口沖（2024年1～11月の計4回）と庄川・小矢部川河口沖（2024年5～11月に計6回）においてプランクトンネットを用いた採集調査を実施し、幼生の生息密度を過去の調査結果と比較した。幼生の平均生息密度は、神通川河口沖では5月に前年比4%、庄川・小矢部川河口沖では2017年比で5月に27%、6月に64%と漁期前半にあたる4～6月に大きく減少した。また、同時期の漁獲量も大幅に減少したことから、幼生の生息密度の低下は、漁獲対象となる親エビ資源の減少に起因していた可能性がある。親エビの減少については、シロエビ漁場となっている海底谷の周辺において海底地すべりが発生したことが確認されており、海底付近の生息環境が悪化したことで、親エビの逃避や減耗が生じた可能性が考えられる。

ベニズワイガニについては、資源状態を把握するため、かにかご調査、深海中カメラ調査および桁網調査を実施した。かにかご調査では、2024年2月に富山湾中央部で調査を実施した結果、1かごあたりの雄の採捕個体数が過去10年平均の31.2個体から5.5個体に大きく減少した。深海中カメラ調査では、7月に富山湾中央部で調査を実施した結果、撮影した映像から算出した生息密度が前年と比べ半減し、同時に実施した桁網調査では、雌雄ともに甲幅40mm以下の生息密度が過去10年平均の26%にまで減少していた。また、成体雌の生息密度については6%にまで激減した。ベニズワイガニの生息密度が低下した要因については、海底地すべりおよび乱泥流の発生により海底環境が悪化したことで、ベニズワイガニが逃避・減耗した可能性が考えられる。

3 成果の活用面・留意点

両魚種ともに、漁期後半は漁獲量が前年（2023年）並みの水準に戻りつつあるが、引き続き調査することで、能登半島地震による影響とその後の回復状況を適正に把握し、漁業者に情報提供していく。

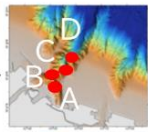
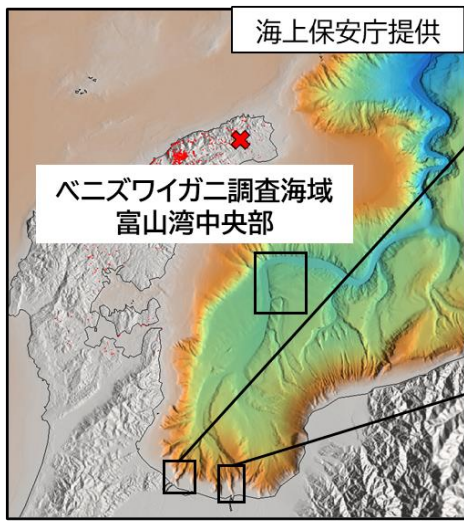
4 問い合わせ先

富山県農林水産総合技術センター水産研究所 海洋資源課

担当：三箇 真弘

T E L : 076-475-0036

(参考) 具体的データ



庄川・小矢部川河口沖



神通川河口沖

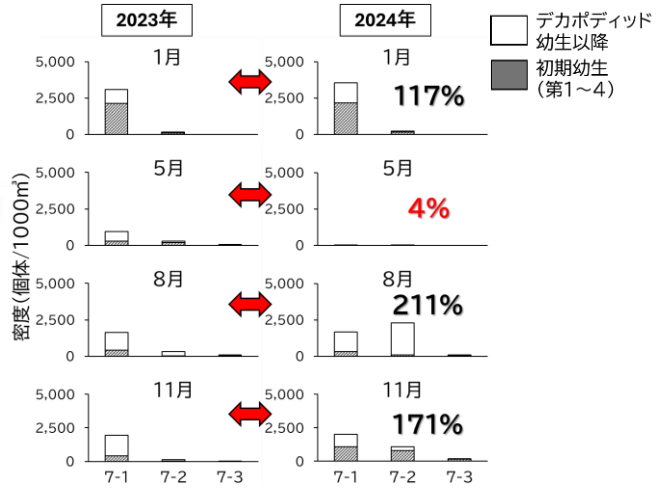


図 1. シロエビ・ベニズワイガニ調査海域 図 2. シロエビ幼生の生息密度 (神通川河口沖)

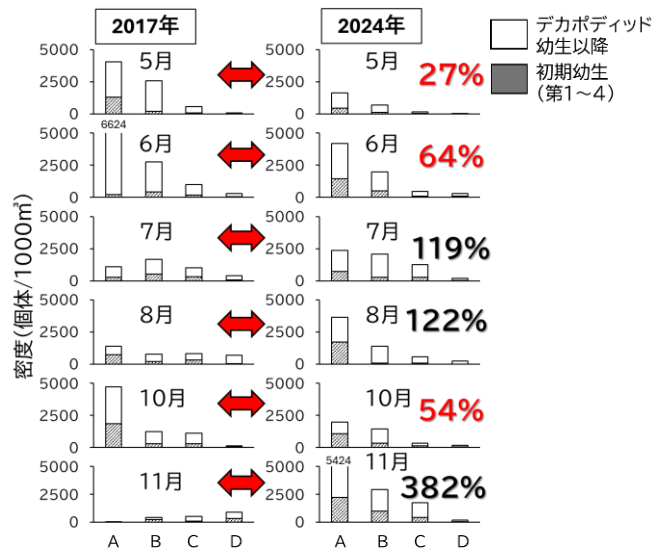
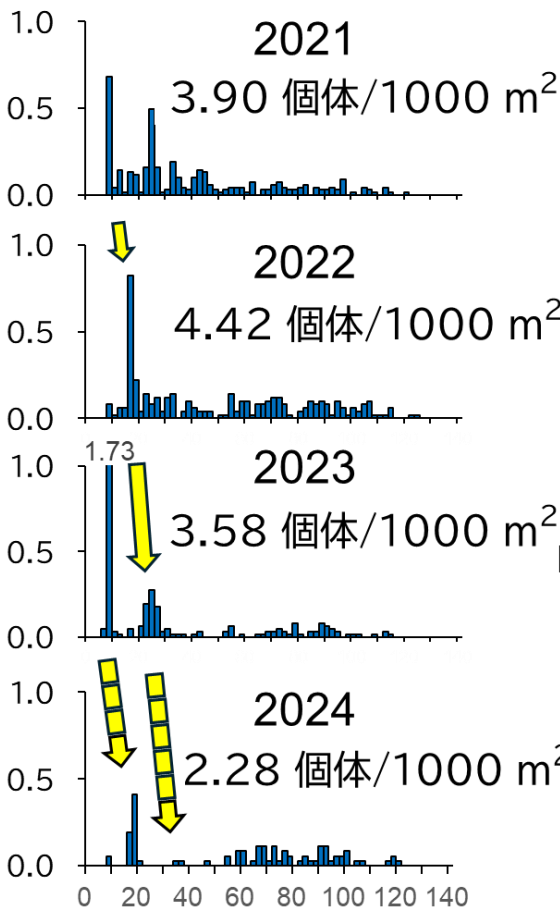


図 3. シロエビ幼生の生息密度 (庄川小矢部川河口沖)

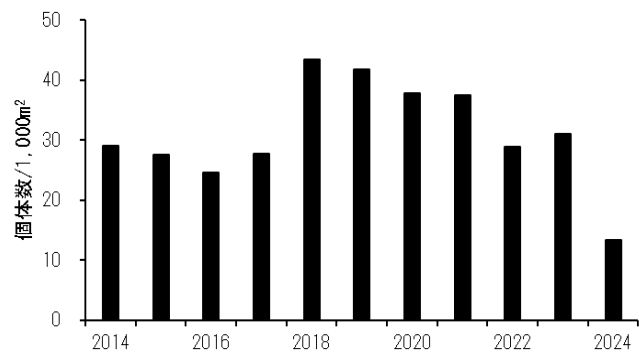


図 5. 桁網調査で採集されたベニズワイガニの甲幅組成 (雄)

図 4. 深海水下カメラ映像から算出したベニズワイガニの生息密度 (個体数/1000m²)